



第九十七号

## 正派宗家・家元継承披露宴

メルマガnoichi97号、今月は「正派宗家・家元継承披露宴」。

令和元年六月、正派家元の継承が40年ぶりに行われました。

厳かな雰囲気の中、三代目家元・中島一子が誕生致しました。おめでとうございます！



六月二十八日、帝国ホテルにおいて「正派宗家・中島靖子 三代目正派家元・中島一子 継承披露宴」が行われました。約八百名の方にご出席頂き、正派にとつて大きな節目を願ってもない形でお祝いすることができました。お忙しい中ご臨席頂きましたお客様、会のためにお力添えを頂きました会員の皆さまにこの場を借りて心から御礼申し上げます。当方奥田雅榮之一も副家元という責任ある立場で様々な任に当たり、微力ながら会の企画に携わりました。当披露宴のために正派の主要役員で編成された実行委員会では、四十年前（前回）の継承式を知る人、今回初めて経験する人、それぞれの立場で意見を出し合い、宗家一族の望みを叶える不足を補ってもらい、お陰様で、万全の体制で準備を整えることができました。

当日の概要を書かせて頂きます。この度の継承披露宴は「継承の儀」「祝宴」の二部制とさせて頂きました。この度司会進行をお願いした草野満代アナウンサーより開会の第一声があり、宗家・家元が入場、私は一、二歩下がって二人に続きました。最初に行われた継承の儀では宗家、家元の二人が登壇し、家元継承の証である「正派」の軸が二代目から三代目に渡されました。この軸は善光寺大本願の第百二十世法主・一条智光上人直筆の書で、嘗て正派初代家元から二代目に渡り、四十年の歳月を経て、この度三代目に受け渡されました。私と叔母の（唯是雅枝）は壇の横に立ち、一連の儀式をお見守り頂くお客様への感謝を胸一杯に想いながら、宗家、家元に合わせて一礼しました。宗家・家元の降壇に続き祝賀演奏、正派が誇る演奏家八名による初代家元作曲の《松籟譜》、水を打ったように静まり返った会場に一糸乱れぬ箏の音（ね）が響きました。長年、中島靖子に仕え、師事してきた方々による演奏は宗家の胸に強く響いたことでしょう。



演奏が終わると祝宴に移りました。はじめに、お二人の方からご祝辞を頂戴しました。人間国宝・米川文子先生、人間国宝・山勢松韻先生、今日の箏曲界を牽引する生田流、山田流の第一人者の両先生にご登壇いただきました。両先生からは後継する私への激励のお言葉もあり、身の引き締まる想いが致しました。ご祝辞が済みますと、各界より人間国宝の諸先生はじめ、立派な先生方にご登壇いただき、新家元を囲んで一斉に鏡割りが行われ、尺八界の重鎮・川瀬順輔先生の「乾杯！」のご発声により、賑々しく祝宴が始まりました。

お料理は洋食のフルコースでした。私は前もって試食する係に任命されたので、その際に料理長の説明を聞きながら一品一品吟味しましたが、いずれも非の打ち所がない、素晴らしいお味でした。

当日は、食べることは二の次、三の次。なによりも、駆け付けてくれた会員の皆さまのテーブルを順に巡ることに時間をかけました。皆さまの笑顔や、あたたかい言葉、エールの数々に逆に勇気付けていただいている気持ちになりました。途中から娘を抱いて、健やかな成長ぶりをご覧に入れましたが、私の影が薄くなるくらい人気で、すっかりアイドルでした。最初は機嫌よくしていた娘ですが、さすがに疲れたと見えて次第にスマイルが消え、後半はズーッと指をしゃぶってしまいました。ま、まだ二歳にもならない幼児、よく頑張ってくれたと思います。

祝宴の最後に、会員からの花束贈呈がありました。万雷の拍手に包まれる中、宗家・中島靖子からお礼のご挨拶がありました。

「皆さま、ありがとうございます」  
祖母の発した一言に、会場全体がほっこり。祖母の人徳、同時に、やはり正派のシンボルのあるべき姿を私は再認識しました。

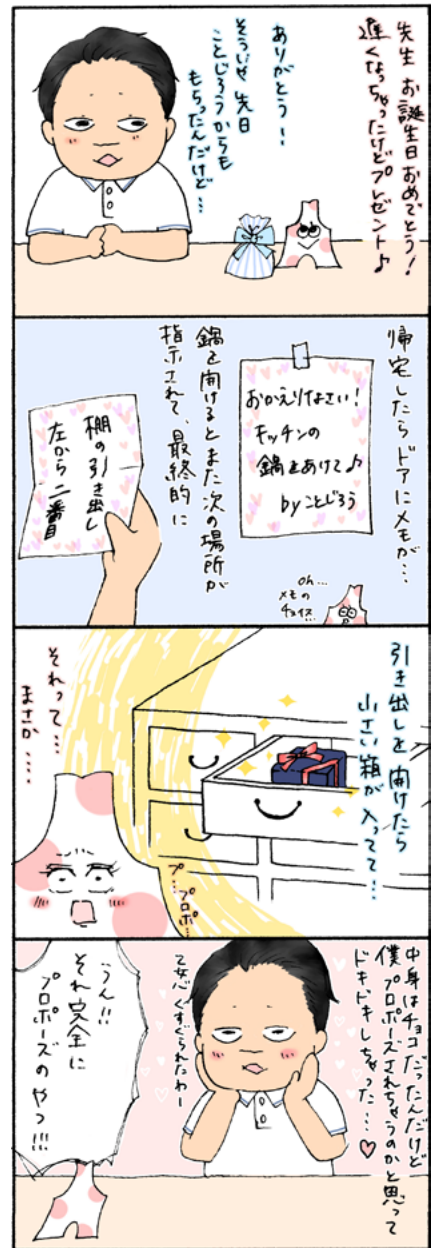


Illustration: morimoe

家元継承が決まった昨年からの気の抜けない日が続き、この度、継承披露宴という大きな目標を無事に終えられましたことは、大変安堵しております。重ねてご臨席の皆様、お力添えを頂きました皆様に感謝申し上げます。そして、今月のメルマガに代えさせて頂きます。ありがとうございました。



◎あともがき◎

人は亡くなった後、四十九日で生まれ変わるといいます。今はお葬式にお坊さんに来てもらうが、昔は亡くなる前にお経をと覚えてもらった宗派もあったそうだ。枕経は来世も人に生まれるよう導くためだった。チベット密教ではそのお経を「死者の書」と呼ぶ。仏教では人が人に生まれ変わるとは限らなくて、その確率は砂浜のすべての砂のうち一粒くらいの確率と言われる。

来世があるかどうかは分からないが、確実に言えることがある。地球の生き物は六億年前までアメーバみたいなものだった。長い時間をかけて進化して今のよう複雑なものになった。その間、少なくとも二度の全球凍結（地上のほとんどが氷る状態）を経ても、生き物は命をつないできた。もしどこかで途切れていたら、地球だって、月や火星のような不毛の大地になっていたはずだ。

人はなんのために生まれてくるのかと若い人に問われて、答えられなかったことがある。それなりの年になつてしまったので、今だったらこう答えたい。「すべて生き物は、つなぐために生まれてきたのだよ。もしかしたら、石も水も星もそうなのかもしれないよ」。

グラフィックデザイナー (http://www.1938.jp) みやはらたかお

